

### 第3回外国語ワーキンググループについて

2015年12月11日に中央教育審議会教育課程部会の外国語ワーキンググループが開催された。

9:00から11:00まで文部科学省3階2特別会議室で行われた。  
一般傍聴者は前回よりやや増え、30~40名程度であった。

今回の議題は以下の通りである。

1. 「CAN-DO リスト利用の方法と課題」の発表（投野委員）
2. 小・中・高等学校を通じて一貫した目標設定のあり方
3. 小学校の授業時数のあり方

今回も前回に引き続き、小中高を通して効果的な目標設定のあり方と小学校における授業時間についての議論が行なわれた。

まずは、文科省からの総則・評価部会特別部会からの伝達事項があった。  
ワーキンググループでの議論における以下のような留意事項が伝えられた。

- ・他教科に関わる事項は関連する部会・ワーキンググループに伝えること
- ・指導要領の文章は伝わりやすく、分かりやすい文章にすること
- ・どのような職業でも役立つような目標設定とすること
- ・年明けからは校種別の議論になることを踏まえて議論すること など

いつもならここで事務局からの資料の説明が長くあるのだが、議題が前回からの続きであることと、次回までに一度議論をまとめたいたの事務局側の意向により、簡略化されたようだ。

次に、投野委員（東京外国語大学）より、「CAN-DO リスト利用の方法と課題」について発表があった。

ヨーロッパで広く利用されている CEFER（言語共通参照枠）の指標を紹介し、そのような汎用的な枠組みの CAN-DO リストを文科省が作成する必要があると述べた。それを具体的に記述するために言語タスクや語彙などと紐づけしておく必要性について言及した。

特に、2008年頃の日本では、他のアジア諸国に比べ、教科書で扱う語数が非常に少なかったため、最近ではかなり増やされたようだ。

ところが、語彙の選定が緩く、教科書会社ごとの共通性が少ない、難易度の高い単語で数が増やされただけという傾向にあるという。語彙をきちんとレベルごとに分類し、その使い方とともに提示することが重要だとの意見であった。

9:45 頃より議論に入る。

まずは、目標設定の在り方についてであった。

投野委員の発表を踏まえ、学習する総語数をしっかり示すべきだという意見や、目標の見せ方を

分かりやすくするべきという意見があった。

その他に、今回多く聞かれた意見は「思いやる」、「相手を尊重する」といった情意面における教育的側面を目標に取り入れて記述すべきではないかということであった。

これに対し、情意面は全教科に通じる課題であり、入れすぎると分かりにくくなるためまずは CAN-DO リストをしっかりと作るべきだという意見も出た。

また、モチベーションを維持するためにも、小中高のつながった目標のイメージがあることは重要で、その学習のつながりを一覧できる表があればよいとの意見が出された。

これに対し文科省からは、現在国語と理科にだけある系統表・構成表といったものを他の教科に取り入れる予定だとのことであった。

最後に、小学校の授業時間について議論がなされた。

前回、本当に 70 時間必要なのか議論すべきといった意見があったことを踏まえ、それぞれ意見が述べられたが、やはり言語活動を充実させるために必要であるとの結論を得た。

そのため、短時間学習が必要となるが、機械的な練習にならないために効果的な活用方法をしっかりと提示すべきだとの意見が出された。

今回は議論のための時間が比較的多くあった。次回はこれまでの議論を整理し、これらの 2 つの議題についてまとめたいとのことである。